

「わし一人、生き残ってしまったなあ。友だちはもう誰もおらん。」

私の祖父は百歳を超えて亡くなりました。孫の私はこの言葉を、幼い頃に何度も祖父から聞きました。その度私は「長

生きしてる分、私といっぱい話ができるやろ。まだまだ長生きしてや。」と言っていました。そう言つと祖父は笑っていました。



私が小学校四年生だった頃、「戦時中のくらし」を家の人に聞くという宿題が出ました。私は祖父に尋ねるのがいいと思ったので、聞いてみました。すると、いつもは何でも気さくに話してくれるのに、その時はあまり話したくない様子でした。ただ、ぼつりと「戦争は絶対にはいけない。」「平和が一番いい。」とだけ話しました。

後で父から聞いたことですが、祖父は村の兵事係をしていたそうです。それは「赤紙(軍の召集令状)」を配達したり、戦地で亡くなったことを家族に伝えたりする係で、村の人たちは祖父が家に近づくと、「息子を戦争に送らなくてはいけないのか。」「もしかしてうちの子は戦地で亡くなってしまったのか。」と恐れていたようです。ある時は「もう夫も子どもも連れて行かれた。それなのにまだ私から子どもを奪うんか。」と泣かれたこともあったとのこと。村の子どもから大人までが、祖父がどこの家に寄るのかを気にして、祖父にあまり近づかなくなったそうです。こんな仕事やめさせてほしいと上司に頼んでも認めてもらえず、祖父は村の人たちにいつも申し訳ない気持ちを持ち続け、「すみません。すみません。」と言つしかなかったそうです。

祖父は亡くなる直前まで罪の意識に悩まされ、毎朝目が覚めると、戦争で亡くなった友だちや知り合い、そしてその家族の顔を思い出し、涙を浮かべていたそうです。

「わし一人、生き残ってしまったなあ。友だちはもう誰もおらん。」子どもの頃の私は、この言葉の本当の意味がわかっていませんでした。こんな思いをするのは自分の代で終わりにしたいという思いで祖父は私に笑いかけていたのだらうと、今では感じます。

私の子どもは小学校四年生です。今でも「戦時中のくらし」について学校で学ぶことがあるのでしょうか。祖父の話は私から聞きました。親は特にかしこまった風でもなく、様々な機会をとらえて私に伝えてくれました。

元号が変わり、新しい時代となっても、命の尊さや戦争の愚かさが変わることは決してありません。戦争を体験していない世代の私にできることは、祖父の思い、親の思いを次世代につなぐことです。

私も折にふれ、平和への思いを子どもに伝えたいと思います。